

金子みすゞの作品と生涯にみる生と死

—分析心理学の視点から—

福田 周

はじめに

金子みすゞは、大正から昭和初期にかけて活躍した童謡詩人である。みすゞは、26歳という若さで亡くなったあと半世紀の間、人々から忘れられていた。しかし、近年同じく童謡詩人である矢崎節夫氏によって再発見された。代表作の「わたしと小鳥とすずと」にみられるように、その独特な視点と無垢な子どもの言葉で語られる詩の世界は現代人の心をとらえ、今でも新鮮な感動を与え続けている。

一方で、みすゞの現実の人生は複雑な家庭背景に翻弄され自死に至るといふ、決して幸せとはいえない人生であった。みすゞの自死には夫との関係や病苦など様々な要因が絡んでいるが、そうした外的な要因ばかりではなく、みすゞ自身の性格的要素もあげられるのではないだろうか。ここでは、分析心理学¹⁾的な視点を用いて、みすゞの性格傾向と作品の創作過程の関連を振り返りつつ、自死に至ったみすゞの内面の思いについても性格傾向を軸に検討していこうと思う。

1. 金子みすゞの生涯

まずはじめに、みすゞの生涯を矢崎による資料『童謡詩人 金子みすゞの生涯』²⁾をもとにしてまとめてみることにする。

金子みすゞは、本名をテルといい、明治36年4月11日、父庄之助、母ミチの長女として山口県大津郡仙崎村に生まれた。なお、この章はみすゞの生涯を記載するため、本章のみみすゞではなくあえて本名のテルを用いることにする。金子家は当時2歳上の兄堅助、祖母ウメがおり、さらに2歳下に弟正祐が生まれる。父親は渡海船の仕事をしていたが、下関で大きな書店

を営む義弟上山松蔵（母ミチの妹フジの夫）の勧めで支店長として清国に渡った。折しも日露戦争後の不安定な情勢の中、明治39年反日運動の煽りを受けて、父庄之助は何者かに殺害されて31歳で亡くなる。テルはまだ3歳にも満たない頃であった。翌年、2歳下の弟正祐は松蔵のもとに養子に出され、母ミチは本屋を開いて一家を支えることとなる。ミチは明るく働き者であると同時に賢い女性であり、幼い頃からテルに目に見えないものの存在を教え、ものの見方や表現の仕方を教えた。

明治43年、テル7歳のときに瀬戸崎尋常小学校に入学する。小学校時代首席を通すほど知的に優秀で、本が好きな大人びた子であった。一方で、近所の子どもたちと花摘みをしたり、ままごとをしたりする明るい少女でもあった。大正5年、テル13歳のときに郡立大津高等女学校に入学する。女学校でも際立った優等生で、卒業生総代も務めている。当時の担任はテルのことを内向性の性格ではあるが、心持豊かな、友達を愛し、礼を尽くす、本当に優しく丁寧で、色白でふっくらとしたきれいな少女だったと語っている。テルは友達の他愛のない噂話や悪口を聞くのが好きではなく、どちらかという人間関係よりも本の世界、自然の世界へ気持ちがちな子どもであった。思春期に入ると、テルは緩やかに他者に心を閉ざしていく。それでも温かな人柄から人に好感を与え、変わり者という評価はない。また、田辺ほほよという大親友ができ、充実した学校生活を送っていた。大正7年、テル15歳のとき、松蔵の妻である叔母の上山フジが病で突然亡くなる。その後妻として母ミチの名前が挙がり、翌大正8年に、母は松蔵と再婚して下関へと移り住んでいった。金子家は兄の堅助、祖母のウメ、テルの三人家族となる。テルは大正9年に卒業生総代として女学校を卒業する。当時、先生からは高等師範学校に進んで教員になることを勧められるが、職員室の雰囲気は自分には合わないからとその勧めを断っている。

母ミチが上山家に入ってから、松蔵はミチに正祐の実の母であることを秘密にさせた。どうしても自分の血を分けた跡取り息子として正祐を育てたかったからである。正祐は、ミチを伯母である新しい母と思い、堅助とテルを年の近い従兄姉と信じていた。一方、堅助とテルは事実を知っており、幼い頃別れた弟の事情を何時も気にかけて接していた。

大正12年、兄堅助が結婚することとなり、テルは兄夫婦の住む金子家を出て、下関の母のもと、つまり上山家へと移る。テルは当時20歳であった。

母の勧めもあり、テルは上山文英堂の支店「商品館」の店番をまかされることとなる。こうしてテルは母そして弟と一緒に暮らすことになるが、一方で松蔵からは正祐に「姉弟」であることを絶対に明かしてはならないといわれ、使用人として引き取ったのだから正祐を坊ちゃん、松蔵を旦那さんと呼ぶように命ぜられてもいた。しかし、テルは大好きな本に囲まれて、好きなときに好きなだけ本が読める生活に満足していた。当時は大正デモクラシーという人々の表現の志向が芸術運動として展開されていった時代であり、特に童謡の世界は隆盛を極め、北原白秋、野口雨情、西條八十らを中心として、『赤い鳥』『童話』などの雑誌が出版されていた。テルもこうした雑誌を読み、特に西條八十の童謡に心を打たれ、自分も童謡を書いてみたいと思うようになり、はじめて童謡を自作して投稿する。そのときのペンネームが「金子みすゞ」である。投稿された童謡は雑誌すべてで選ばれ、掲載された。童謡詩人としての金子みすゞの誕生である。『童話』では、「お魚」と「打ち出の小槌」が選ばれ、西條八十からは「どこかふっくりした温かい情味がうた全体を包んでいる」と特に推薦された。みすゞは掲載されたことに関してその感激を『童話』の通信欄に以下のように書き送っている。

「童謡と申すものをつくり始めましてから一ヶ月、おづおづと出しましたもの。落選と思ひ決めてそれを明らかにするのがいやさに、あぶなく雑誌を見ないですぐす所でした。嬉しいのを通りこして泣きたくなりました。ほんとうにありがとうございました。」³⁾

以降次々と作品を投稿し、毎月何編もの作品が選ばれ、西條はそのたびに絶賛した。西條だけではなく、同世代の読者や投稿詩人たちの心も捉え、テルは憧れの星となる。テルは童謡詩人としてデビューする一方で、私生活では大きな出来事に見舞われる。

大正14年、テル22歳のとき、大親友であった田辺が身重のまま体調を崩し亡くなる。また、テルには意の沿わぬ結婚話が持ち上がっていた。松蔵は、正祐が店を継げるようになるまで、繋ぎとして店を任せられる人物を探していた。そして、テルを実の姉とは知らずに接する正祐の態度を心配もし、はやくテルを結婚させたかったのである。テルの結婚相手は、上山文英堂で手代格として働いていた宮本啓喜であった。大正15年2月17日に結

婚式が行なわれる。テルと宮本は上山文英堂の二階に住むこととなる。テルは翌月西條八十の帰国にあわせて再び『童謡』へ投稿するようになる。しかし、今度は『童話』自体が7月号で突然廃刊となってしまう。一方、テルの作品の評価は高く、童謡詩人会に認められ、「大漁」と「お魚」が『日本童謡集 1926年版』に掲載されることとなる。当時の一流詩人たちを会員としたこの会で、女性で会員となったのは与謝野晶子につぎ二人目の名誉であった。

童謡詩人として中央で注目を浴びながら、実生活では結婚して数ヶ月で早くも離婚話が持ち上がっていた。夫の女性関係が松蔵に知れたためである。夫の宮本は、結婚前にも芸者と心中未遂事件を起こすなど、商才はあるが女性関係にふしだらで遊郭通いの絶えない状態だった。また、弟の後継問題も絡み夫と叔父の関係が悪化したため、テル夫婦は書店を辞めて追われるように店を出ることとなる。テルが宮本との離婚を思いとどまったのは、このとき妊娠していたためである。大正15年11月14日に、長女ふさえが誕生する。子どもの誕生後、テルは誰から見ても明るく元気になったという。童謡も西條が主宰する雑誌に投稿するくらいとなり、何よりふさえを大事にした生活をこれ以降テルは送ることとなる。しかし、夫は仕事が定まらず転居を繰り返す日々を過ごし、次第に家に収入を入れなくなり、また、帰ってこなくなっていた。昭和2年、テル24歳のとき、祖母ウメが死去。さらに、テル自身も淋病を発病し、寝たり起きたりの暮らしとなる。淋病は夫からうつされたものであった。当時はまだペニシリンが発見されておらず、淋病は放置すれば死にいたる病であった。それでも詩作を続けるテルだったが夫はそれを好まず、ついには一切の文通を禁じ、童謡を書くことも禁じた。このときテルはこれまで書いてきた作品を三冊の手帳に清書し、師である西條と、正祐に送る。これ以降テルは詩作を行なわなくなる。その後、夫の始めた菓子問屋の仕事は順調になったが、女遊びが激しくなり、テルはついに自分が至らないからと病状の悪化に伴い離婚を申し出て、昭和5年2月にテルは正式に離婚する。そのときに出した条件は、娘のふさえを自分で育てたいということであった。

離婚後テルは上山文英堂に戻るが、まもなく一旦は承諾した宮本から再三娘のふさえを引き取りたいという手紙が来るようになる。しばらくテルはそのままにしていたが、ある日いつもと違う文面の手紙が届く。それは「3

月10日にふさえを連れて行く」という内容であった。当時親権は父親にしかない時代であり、連れに来られたら拒むことができず子を渡すしかなかった。3月9日、テルは一人で写真を撮りに行き、神社に参り、買って来た桜餅を母と娘とともに食べ、夕食後に娘を風呂に入れた。風呂では自分は一緒につからず、ただたくさんの童謡をふさえに歌ってやった。そしてふさえはミチと一緒に床につき、テルは二階の自室に上がろうとしたが、ふとふさへの寝顔を覗き込んだまま、しばらく階段の中ほどから動かなかった。そのときテルは「かわいい顔して寝とるね」といい、これがテルの最後の言葉となった。テルは枕元に最後の姿を写した写真の預かり証と三通の遺書を残して睡眠薬を飲んだ。一通は夫宛で、あなたがふうちゃんにしてあげられるのはお金であって、心の糧ではない。どうか私を育ててくれたように、母にふうちゃんを預けてほしいと。一通は母ミチと叔父松蔵に、くれぐれもふうちゃんのことをよろしく、今夜の月のように、私の心も静かですと。昭和5年3月10日、テルは26歳の短い生涯を終える。死後、ふさえは遺書の通り祖母ミチのもとで育つことになる。

2. みすゞの作品と性格傾向

みすゞの詩の題材となるのはささやかなありふれた日常であるが、みすゞ独特の視点によって、それらはファンタジーに満ちた世界へ変貌する。その中ではしばしば太陽、光、生と対比された形で月、影、墓や弔いが描かれる。こうした生と死という両極端の視点が同時に起こるような視点が眼を引き、しかも、子どもの言葉で語られることによって、ある種の温かさや懐かしさがそこに漂っている。みすゞの詩の特徴を生み出す背景として、みすゞの類まれな直感力とイマジネーションの力をあげることができようが、さらに、みすゞの性格傾向にその影響をみることもできると思われる。渡辺由紀子⁴⁾が述べている通り、みすゞは子どもの頃から従順、真面目で、感受性が豊かであり、自然への親和性を示すその性格傾向は生涯変わらない。ユング (Jung, C.G.) のタイプ論でいうところの内向性の傾向の強い性格であるといえよう。

ところで、分析心理学の創始者であるユング⁵⁾は、自身の性格理論を構築する際にフロイト (Freud, S.) とアドラー (Adler, A.) の態度を比較し、

フロイトはその個人の外界における人間（家族）や事件（外傷体験）を人間の行動を規定する要因と考えるのに対して、アドラーはその人の内的な要因つまり権力への意思を重視して対立した点を重要視した。つまり、同じ現象でもその人の現象への基本的構えが異なれば、その考え方も見方も変わるということである。その後ユングは、この二つの構えが単に対立しているものではなく、補い合う心的機能であることを発見する。内向とは自分の動機づけが主に自分自身の内面から出てくるもの、つまり関心が内界の主観的体験に向かいやすい人の態度である。一方、外向とは動機づけが主に外部から来るもの、つまり関心が外界の事象や人に向けられやすい態度である。すなわち内向も外向も態度であって、両者はいろいろな割合で個人の中に存在する。同一人物に程度の差はあれ内向的態度と外向的態度はあり、また、人生の中でその構えが変化することもありうる。もちろん中間型のほうが多いが、大体はどちらかの態度が習慣的に現れ、片方は無自覚な場合が多い。それではみずゞの場合には、こうした内向性の態度がその生涯と作品にどのような形で表れているのかをここで考えてみよう。

みずゞの内向的性格は、小学校時代では優等生として周りから評価される。女学校時代になると、まわりの同年代の子どもたちの積極性、外向性、衝動性に負担感を感じ始めたのであろう、みずゞは徐々に対人葛藤から身を引き、書物への没頭、自然への一体感へ関心を狭め、その自分のイメージーションが作り出した幻想の世界で遊ぶことが多くなる。たとえば、詩1「学校へゆくみち」という詩をここで取り上げてみよう。

詩1「学校へゆくみち」

学校へゆくみち、ながいから	いつもお話、かんがへる。
みちで誰かに逢はなけりゃ	学校へつくまでかんがへる。
だけど誰かと出逢ったら	朝の挨拶せにやならぬ。
すると私はおもい出す、	お天気のこと、霜のこと
田圃がさびしくなったこと。	
だから、私はゆくみちで	ほかの誰にも逢はないで、
そのおはなしのすまぬうち	
御門をくぐる方がいい。 ⁶⁾	

学校に登校する道すがら、みすゞは一人自分の心の中であれこれ想像をして歩いている。その時の関心事は級友ではなく、自然の風景である。つまり、関心は自身の内面に起こる考えや感覚なのであって、その際、誰かにあって挨拶をすることはその内面の想像を中断させる邪魔な出来事なのである。孤独が好きということではなく、関心が内面に深く沈降しやすい内向的態度が顕著であるがゆえの一人の道行なのである。内向的性格の傾向は、学校時代を謡った次の詩2「転校生」をみてもはっきりとわかる。

詩2「転校生」

よそから来た子はかわいい子、どうすりゃ、おつれになれよかな。
おひるやすみにみていたら、その子は桜に もたれてた。
よそから来た子はよそ言葉、どんな言葉で はなそかな。
かえりの路でふと見たら、その子はお連れが 出来ていた。⁷⁾

みすゞは、転校生を意識しつつも、すぐには声をかけられず、どう声をかけたらいいのかを心の中であれこれ考えはじめる。そうこうするうちに、ほかの子が先に声を掛けてしまい、友人を得るチャンスを逸する。外向的な人ならず関心を持った時点で深く考えずに声をかけるのだが、内向的な人は「こんなときはどうふるまえばいいんだろう」とあれこれ自分の考えにとらわれてなかなか行動に移せない。内向者が対人関係に消極的・非社会的であるといわれやすいのは、外向者とは違ったこうした態度のゆえである。外界への関心をもちつつも、それをそのまま感受するのではなく、一旦自分の内面にに取り込み、自分の視点でその意味を見出そうとするわけである。こうした態度は対人関係などの積極性では外向者に先を越されてしまうが、長所となる場合もある。その面がよく表れている詩が次の詩3「不思議」である。

詩3「不思議」

私は不思議でたまらない、黒い雲からふる雨が、
銀にひかっていることが。
私は不思議でたまらない、青い桑の葉たべている、蚕が白くなることが。
私は不思議でたまらない、たれもいじらぬ夕顔が、
ひとりではらりと開くのが。

私は不思議でたまらない、誰にきいても笑ってて、
あたりまえだと、いうことが。⁸⁾

外向者は外界をそのまま受け入れることが得意であり、それを享受するすべをたくさんもっている。しかしそれゆえ、えてして根本的な疑問をもたずに現実を過ごしてしまいがちである。つまり、それは「当たり前」であって、そもそもそれはなぜそうなのかとは考えようとしないのである。考えていてはそれをそのまま楽しめない。みすゞの視点はそうした人にとって意外性をもった視点を提供してくれる。そもそもそれはなぜなのか、どうしてそうなるのか、自分にとってどういう意味があるのかと不思議がるころの態度がみすゞにはある。幼い子供がある年代になると盛んに「どうして？」と親に質問攻めをするが、それはその子にとって世界が意味のある世界に開かれたからであり、新鮮な驚きと関心をもって、外界と自分の考えをしっかりと関係づけようとするきわめて主体的で積極性を持った態度である。このように、みすゞは基本的には内向的の態度が強いわけだが、決して外向的の態度が欠けているわけではない。両者の態度がみすゞのころの中で相補的に混ざり合いバランスをとっている。詩4「次からつぎへ」はそのころの態度の揺れがよく表れている。

詩4「次からつぎへ」

月夜に影踏みしていると、「もうおやすみ」と呼びにくる。

(もつとあそぶといいのになあ。)

けれどかえってねていると、いろんな夢がみられるよ。

そしていい夢みていると、「さあ学校」とおこされる。

(学校がなければいいのになあ。)

けれど学校へ出てみると、おつれがあるから、おもしろい。

みなで城取りしていると、お鐘が教場へおしこめる。

(お鐘がなければいいのになあ。)

けれどお話ししていると、それはやっぱりおもしろい。

ほかの子供もそうかしら、私のように、そうかしら。⁹⁾

内向－外向はみすゞの中にも独特のバランスで共存している。詩4は、

関心は主に自分の内面に向けられるが、一方で、外的刺激に対してまったく無関心ということではなく、「学校に行ってみると友達がいるからおもしろい」と、それなりに皆と同じように外界との接触を楽しんでいる。つまり、習慣としては内向性が優っているということなのである。

ところで、内向者の性格特性として外界の環境に対する従順さというものがある。金子みすゞもまた、学校でも家庭でもいい子であり従順な女性であった。でしゃばり、野心などとは程遠い態度である。家族背景の複雑な変遷にもみすゞは黙ってそれに従うことを常としている。一方で、内向者は普段は過度に自信なさげで従順そうに見えるが、一旦思いこむと少々の障害にはたじろかない態度をとるときがある。それは自身の内面の態度が表に出た時である。ただ、自分の内面で体験したものを適切に表現することが内向者はえてして難しいので、普段は周りにあわせて生きているのである。しかし、一旦自分の内的体験を他者に伝えるすべを得られたなら、それは創造性豊かな個性として活かされる場合がある。内気で夢見がちな少女であったみすゞが大きく変貌するのは、兄の結婚を契機に小さな書店の店番をするようになってからである。そこで童謡の世界を知り、自らのイメージを外に表現する手段を得る。これまで様々な運命に従順であったみすゞが、はじめて自分の意思で自らを能動的に語り始めたのである。この時期がみすゞにとっては最も幸せな時期だったのかもしれない。その様子は詩5「砂の王国」にも表れている。

詩5「砂の王国」

私はいま 砂のお国の王様です。

お山と、谷と、野原と、川を おもう通りに変えてゆきます。

お伽ばなしの王様だって、じぶんの国のお山や川を、

こんなに変えはしないでしょ。

私はいま ほんとにえらい王様です。¹⁰⁾

この詩は子どものお砂場遊びをモチーフにして、自分の内的イメージを形あるものへと自由に想像する喜びが謡われている。砂の王国は一方で、現実の王国ではなく砂上の城のごとく脆く崩れ去る幻でもあるが、内面の想像とはまさにそのような存在であり、変幻自在に産まれては消えてい

く変容の器でもあろう。ところで、心理療法の技法の中に箱庭療法という技法がある。これはまさに砂の器の中でこころの内面のあり様を外に表現し、またそれを内的に味わう体験を通して、より自身の内界との対話を促進させる技法なのであるが、みすゞにとって詩とはまさにそうした体験であったと思われる。しかし、再びみすゞに過酷な外的現実が押し寄せる。それが意に沿わぬ結婚である。

3. みすゞの生き方と死

みすゞの自死は現代の視点から見れば納得のいかないことに思われるが、時代の影響や家族関係の複雑さがそこには強く働いていることは明らかであろう。しかし、さらにこれまで述べてきたみすゞ自身の性格や考え方をその背景としてとらえてみることもみすゞの自死を考える上で重要なことなのではないだろうか。

みすゞは早くして父を失い母親の手で育てられるが、みすゞの不幸のはじまりは、この母親との別離に負うところが大きい。思春期の16歳のときに母親が再婚をするが、養子に行った弟の事情もあり、母を母として呼べない複雑な事情をみすゞは抱え込むこととなる。父親代わりの兄堅助に守られながら母親不在の生活を過ごし、兄の結婚を期に再び母との生活が取り戻される。しかし、弟のことがあり、本当の母でありながらそう呼べない事情はいかわらず続く。つまり、父、弟、母、そして兄とみすゞにとって大事な対人関係が次々と失われていく。それをみすゞは運命として静かに従う生き方をする。結婚する前の叔父の家での生活は、「使用人」としてぼつんと一人店番をする生活となっていたわけであるが、先述したように、それはみすゞにとっては外的には孤独であるが、内的には逆に豊かな想像の世界を生み出すことになる。現実の生きづらさの中、みすゞは童謡の世界という内的イメージネーションに自分の思いを託し表現することで、心のバランスをとっていたのであろう。

さらに、結婚後には親友も失い、夫とのこころの関係は冷え切り、さらには夫から一切の創作を禁じられたみすゞにとって、意味のある外的対象は子のふさえだけとなった。つまり、みすゞに唯一残された希望は、ふさえの母として生きることであったのではないだろうか。その思いが表れていると考

えられる以下のような言葉が、女学校の同窓会誌に寄せた消息欄に残っている。

「唯子供が一人それが始めてそれが終わりで御座います。あの頃日輪の高さにまで翔けた空想も今は翼を失ひました。残った者は一人のおろかしい『母』それだけでございます……」¹¹⁾

ところで、みすゞの作品の中には母のイメージを謡った詩は多くあるが、そのうちのひとつをここで取り上げてみよう。

詩6「土と草」

母さん知らぬ 草の子を、なん千万の 草の子を、
土はひとりで 育てます。

草があおあお 茂ったら、土はかくれて しまうのに¹²⁾

この詩6は、土と草を謡ったものであるが、明らかに子を育てる母の心情を謡ったものである。みすゞはこの詩でひたすら子の成長を第一にすべてを捧げる母の強さを謡っている。そもそも土とは豊饒性そのものであり、自然界での母なるものである。それは包みこみ育む女性の強さでもある。

子の母として生きる決意をしたみすゞは、それ以降創作をやめる。唯一創作に代わるものとして死の5ヶ月前から1ヶ月前まで続けられた子ふさえの片言を拾い集めた日記「南京玉」が残されている。ひたすら子の話した言葉をそのまま書きつけているものだが、後半はみすゞにとってはつらい言葉がつづられるようになる。たとえば、「オ母チャン、ネンネシタライヤン、暗イトキネンネスルノヨウ」、「オ母チャンノオモシロイオ話イヤン、オバアチャンノオモシロイ話がマダオモシロイヨ」、「シャボントオ花アゲルカラオ母チャンインデオカヘリ」、「オ母チャン、サヤウナラ、ヒトリデオカヘリ、ヤマカラオカヘリ、マチカラオカヘリ」といった内容である。¹³⁾

この頃、みすゞの体調は思わしくなく、一日中床に伏すことが多くなっていたため、ふさえは祖母の家で過ごすことが多くなり、母みすゞとの接触が少なくなっていた。無邪気な子どもの言葉ではあるが、みすゞにとって唯一の生きる希望である娘からあからさまに拒否されることは心に深く痛手を

負ったと想像される。さらに、追い討ちをかけるように夫からの娘の引取りを迫られたとき、みすゞに残された希望は、自分の命をとしてもふさえが懐いている祖母つまり自分の母に子を託すことだったと想像される。ところで、振り返れば祖母もまた家の都合に翻弄され、自分の娘を娘としてしっかり育む機会を奪われた母であり、託された孫娘はいわばテルという自分の娘の生き写しでもあったであろう。

みすゞは当時の時代の女性としては常識外れの生き方をした。しかし、それはあえてそうした生き方を選択したということではなく、そういう生き方しかできなかったゆえである。知的に優秀で才能のある彼女がもし外向的な関心を女学校時代にもっていれば、先生の勧めの通り教師になっていたかもしれない。しかし、みすゞはそのような社会人としての自分を想像できなかったのだろう。書店の店番として一人の世界に安住し、社会から緩やかに離れ、自分の内的世界に没頭できる環境をみすゞは選んだ。この時代が、彼女にとってはもっとも幸せで自分らしい生き方だったはずである。しかし、みすゞの意思とは関係なく外的圧力が運命をかえる。意に沿わぬ結婚を通して、みすゞは「母」として生きる決意をする。そうさせたのは詩6の創作でもあきらかなように、みすゞ自身に母なるものへの親和性があつたからであろう。しかし、みすゞは結果的には子を育てる母にはなりえなかった。自死を選んだみすゞのころのうちにどのような思いがあつたのだろうか。

子の引き取りを迫られた時、みすゞの取りえた選択肢は、単純に考えると①子を捨て、自分が生きる（子を夫に渡し、自分は自分の人生を始める）、②子を生かし、自分も共に生きる（子を夫に渡さずこのまま子どもと一緒に生きる）、③子を殺し、自分も死ぬ、④子を生かし、自分は死ぬ、の4つが考えられる。①は、母として生きる選択を離婚の際にすでにしているのでありえないであろう。②は当時の親権制度上現実的に不可能なことである。③の選択は、実は当時の一般的な母親の自死のあり方であった。当時、みすゞのように不遇の運命に見舞われ自死する母親も多くいたが、多くは子を道連れにしての自死である。「残される子が不憫」という母の情愛ゆえの殺人である。つまり、この世で一緒になれない代わりにあの世で一緒にしようとする母の思いが背景にある。母なるものの強さには影がある。この世の善悪の基準を超えて、すべての生き物を産みだし育むという母なるものの強さは、裏返せば、この世の善悪の基準を超えて、すべての生き物を土にかえす（死

に至らしめる)強さでもある。先の選択肢の③の心中は、母なるものの影の強さによるものであろう。みすゞは、「おろかな母」でありながらも、母なるものの影に吞まれず、みすゞという一個の私として、自分のすべきことの最善を尽くしたいという信念があったのではないだろうか。つまり、当時心中が当たり前というあり方を、当たり前とそのまま受け取らず、本当に自分にとってどのようなことが今意味あることなのかを考える内向者の視点が強く働いていたのではないだろうか。④の選択は、子を思う情に裏打ちされた「考え」であり、やはり内向者の持つ常識にとらわれない強さでもある。ちなみに、みすゞの自死は当時世間的には無責任な行動であると批判されている。¹⁴⁾しかし、みすゞの自死は、無責任な衝動的行動ではないだろう。逆にある強い意志と意図をもった積極的な行動だったのではないだろうか。

みすゞは自死にあたって「遺言」を残している。この遺言によってこの世の論理、つまりは親権制度をみすゞは超越した。事実、その後ふさえは父に引き取られることなく、みすゞの遺言どおりに祖母のミチの元で育てられることになる。当時の親権制度は家父長制度に支えられ、父親に絶対的な養育権利が与えられていた。母側からそれを拒絶することは常識的には困難なことであった。父親の元での養育に絶望を抱く母親は、この世での子の不憫を考え、それならばいっその世でともに生きようと、苦渋の選択として心中を選ぶことが多かった。みすゞにしても、ふさえがこのまま父親の元へ連れ去られることには反対だったわけであり、それは、夫への遺書の中の言葉にもよく著されている。父宮本がふさえにしてあげられることはお金であって、心の糧ではないという言葉は、みすゞがふさえにとって何が一番幸せなことなのかをはっきりと考えていたことを示している。そして、その心の糧を与えられるのは、病気のために娘との十分な関わりを持ってない自分の代わりに、ふさえに愛情を注ぎ大事に育ててくれている母ミチであるともみすゞが考えたのは当然のことであろう。親権制度そのものを適用すれば、宮本はふさえを自分の手元に置くことは可能であったはずである。しかし、そうできなかったのは、遺言の内容がそれぞれ本人にとって正鵠を得るものだったからに相違ない。死者の言葉は、訂正不能の「永遠」の拘束力を持つにいたる。「遺言」という内面の態度の表明によって、子どもを守る母親としてのみすゞの意思は死してなお生き続けることができたのではないだろうか。内向者の持つ常識にとらわれない強さあるいは頑固さがその死に生を与えてい

るとも思える。そこまでしてみすゞが子を自分の母に託すこと望んだことにはいったいどんな思いがあったのであろうか。その可能性を示すかもしれない詩を最後に取り上げたい。詩7「こころ」である。

詩7「こころ」

お母さまは 大人で大きいけれど、お母さまの おこころはちいさい。
だって、お母さまはいいました。 ちいさい私でいっぱいだって。
私は子供で ちいさいけれど、ちいさい私の こころは大きい。
だって、大きいお母さまで、まだいっぱいにならないで、
いろんな事をおもうから。¹⁵⁾

詩7は、親の子を思う心情と親の世界を飛び出してより広い世界に成長していく子どもの飛躍が語られている。子どもの自立のテーマが見事に謡われている。子どもでいっぱいの母は、えてして自分の狭い世界で子どもの幸不幸を決めてしまう。心中の背景にはそうした母中心の思い込みがある。一方、子どもは母を大事にしつつも、母以外の世界へ目を向けて歩みだす可能性に満ち溢れている。みすゞはそうした可能性を娘に見出し、自身の生きたかもしれない人生の可能性を娘に託し、そして自分がそうであったように、その可能性を育むことができる自分の母に自分の子ども託したかったのかもしれない。

おわりに

みすゞの生涯と作品を通して彼女の性格傾向を検討し、分析心理学的視点からみすゞの性格傾向は内向性が優位であり、関心が常に内界の主観的な体験に向きやすい傾向であることが明らかとなった。その内向的な態度は他者からみれば消極的で従順な態度とみられやすい。事実、みすゞは家庭の複雑な関係の変化に対して強く反発して積極的に行動を起こすということはせず、他者の意向に沿って従順に生きてきた。しかし、みすゞは童謡の世界に触れたことで、これまでただ自分の内界に空想としてしまい込まれていた主観的体験を外に表現する方法を学んだ。つまり、自分の内面を適切に表現する術を得たのである。それは外面的あるいは常識的な発想ではなく、まさに

みすゞの内面での体験であるがゆえに個性的な表現であり、それがまた他者をも感動させる。みすゞの童謡は自身の主観的感覚を通したものであるがゆえに他人が真似できない独創的な表現なのである。そして、童謡を通して自分の内面の思いを他者に伝えることによって、みすゞは他者からの共感と評価という機会を得る。これは自分の主観的あり方そのものが他者に受け入れられ認められたという体験に他ならず、みすゞにとっては自分がこの世に存在する意味や価値といったものをはっきりと手ごたえとして感じられた機会であったに違いない。しかし、夫との不幸な関係によって創作の機会をみすゞは断たれてしまった。

詩作という自己表現の機会を失いはしたが、みすゞは以前のように黙って周りに従うだけの消極的なあり方をしなくなった。離婚を決意し、自分のこれからの人生を子のために生きようと決めたことは、決して受動的な態度ではなく、みすゞ自らが主体的に考え行動した結果であった。だが、病いがそのみすゞの思いを挫く。しかし、そのことによって生きる目的を失い絶望の末に衝動的に自死に追い込まれたのではなかった。みすゞの自死は、娘の将来を考えた末の主体的な選択だった。遺言にその内なる思いが込められており、それは娘には物質的な糧ではなく、心の糧を与えたいという思いであった。みすゞ自身内向的であるがゆえに、こころの内面の大切さを十分に知っており、また、こころの内面のあり方を大事にし、育ててくれた自分の母に子を託すことが、みすゞに自死を選ばせた要因だったのではないだろうか。

ところで、子を残して自死する母というあり方は、当時の世間では無責任で愛情のない母とみなされてしまう。事実みすゞの自死は世間では無責任な行動と誤解されて報道されている。その後遺族の間でもみすゞの自死は娘には秘密にされていたようである。

後の矢崎によるふさえへのインタビュー¹⁶⁾において娘のふさえは、母の自殺を知らずに祖母のもとで育ち、のちに偶然見つけた母の遺書を読んでその事実を知ったそうである。また、その意味を知らぬまま毎年3月9日に祖母と一緒に母を偲んで桜餅を食べるのが行事となっていたそうである。母の自死の事実を知る前は、ふさえは自分を置いて死んでしまった人としか母を思えなかったらしく、自死を知った後もしばらくは、やっぱり自分を置いていってしまったんだと感じていたそうである。しかし、自分も母になり娘ができると母の気持ちが理解できるようになったと述べ、母は人殺しをしな

いで死んだんだと思えるようになったという。当時の世間一般の風潮からすれば、子を残して自分だけ死ぬ母親は母親としてふさわしくない行動であった。残される子の不憫を思えば心中を選ぶのが自然であった。特に外向的な人であれば、まず自分の思いよりも自分の行動が外からどうみられるか、それは対外的にふさわしい行動なのかを気にしやすい。もし、みすゞが自分の内面よりも対外的なことに関心を強くもつような性格だったならば、心中を選んでいたらかもしれない。しかし、みすゞは子を残して自分だけの死を選んだ。それは、彼女が内向性が強く、先述したような自分の内面の思いに強く関心を持ち、世間体より自分が何を良しとするかを大事にするところのあり方を貫いたからではないだろうか。ふさえはそうした母の内面の思いをはじめのうちは理解することができず、世間一般的の意味でしか母の死の意味をとらえることができなかつた。幼くして母と別れたふさえは、母の思いを直接聞くことができなかつたのであるから理解できないのは当然であろう。しかし、ふさえもまたみすゞと同じ子の母となり自分の子への様々な思いやこころの葛藤を経験するなかで、自分の母の本当の思いに気づけるようになったのではないだろうか。ふさえの「母は人殺しをしないで死んだんだと思えるようになった」という言葉は、みすゞの内に秘めた思いを、子がしっかりと理解し、そして生きた証に思えてならない。

注

- 1) 分析心理学とは、スイス生まれの精神科医であるユングが、学問上の対立によってフロイトから離反し、1913年に独自の精神療法理論を展開し、それを分析的心理学 (analytische Psychologie) と名付けた。ユングは、無意識を2層に分け、個人的無意識と人類に共通してみられる普遍的無意識とに分類し、フロイトよりも一層に無意識の機能を重視した。ユングの提唱した概念にはコンプレックス・外向一内向、元型などがある。
- 2) 矢崎節夫 1993：『童謡詩人 金子みすゞの生涯』JULA 出版局。
- 3) 矢崎 1993、178頁。

- 4) 渡辺由紀子 1997:「童謡詩人 金子みすゞの病跡」『日本病跡学雑誌』54、23-32頁。
- 5) Jung, C.G. 1921: *Psychologische Type*. Rescore Verbal, Zürich. 邦訳: C.G. ユング『タイプ論』(林道義訳)、みすゞ書房、1987年。
- 6) 『金子みすゞ童謡全集3 空のかあさま・上』、184-185頁。
- 7) 『金子みすゞ童謡全集2 美しい町・下』、94-65頁。
- 8) 『金子みすゞ童謡全集6 さみしい王女・下』、56-57頁。
- 9) 『金子みすゞ童謡全集3 空のかあさま・上』、178-179頁。
- 10) 『金子みすゞ童謡全集1 美しい町・上』、90-91頁。
- 11) 矢崎 1993、299頁。
- 12) 『金子みすゞ童謡全集3 空のかあさま・上』、118-119頁。
- 13) 矢崎 1993、314-315頁。
- 14) 矢崎 1993、339頁。
- 15) 『金子みすゞ童謡全集6 さみしい王女・下』、16-17頁。
- 16) インタビュー: 上村ふさえ「母のこと、そして詩人みすゞのこと」『文藝別冊 総特集 金子みすゞ』河出書房新社、2000年、38-57頁。

参考文献

Adler, A.: *The science of living*. Edited by Benjamin Ginzburg. New York: Greenberg, 1929. 邦訳: A. アドラー『個人心理学講義: 生きることの科学』(岸見一郎訳)、一光社、1996年。

本論は死生学研究所2010年度第3回連続講座(2010年6月12日)における同題の発表に基づいている。

Life and Death in the Poems and Life of Misuzu Kaneko from an Analytical Psychology Approach

by Amane FUKUDA

Misuzu Kaneko was a poet who wrote many children's songs during the early 20th century. She died at the age of 26. Most people have forgotten her for a half-century. However Setsuo Yazaki, also a writer of verse for children's songs, recently reevaluated her poems and has republished them. Misuzu Kaneko had an unhappy life. She also had a complicated domestic background. She committed suicide and thus left her only child, a daughter, motherless. It has been thought that she committed suicide due to discordance with her husband or because of sickness. Therefore, many researchers have paid attention to the external factors surrounding her death. Because of this, internal factors (such as her personal character) so far have rarely received much attention in regard to her death. The first goal of the author is to clarify Misuzu Kaneko's character tendencies. The second is to search for a relationship between such tendencies and the fact of her suicide. In conducting this research, an attempt was made to interpret her poems and life from the viewpoint of analytical psychology. The results revealed she had an introverted personality. For example, the influence of this personality trait most obviously appeared in a poem called, "Transfer Student." It is deduced from this poem that one of the factors that caused her suicide was her personal character.